

會 報

令 和 6 年 度

(第44号)

東京電機大学教職校友会

東京電機大学教職校友会 会報 第44号

CONTENTS

- 3 会報第44号に寄せて 会長 杉浦 文俊
- 4 特集 学校紹介
 - 4 香川県 石丸 達也 (香川県立高松工芸高等学校)
 - 5 大分県 佐藤 茂 (大分県立情報科学高等学校)
 - 7 東京支部 河野 恒義 (東京都立六郷工科高等学校)
 - 9 東京支部 井坂 晃宏 (北豊島中学校・高等学校)
- 11 会費納入のお願い
- 12 令和5年度・6年度の活動について
- 13 令和6年度 顧問・役員・幹事一覧
- 14 令和6年度 教職校友会会員数
- 15 教職校友会会則

<表紙の題字「会報」は、初代学長丹羽保次郎先生の揮毫によるものです>

— お知らせ —

- *学校別の会員名簿は、個人情報保護の観点から掲載をしていません。
- *会員への問い合わせ先等必要な場合は一般社団法人東京電機大学校友会にお問い合わせ下さい。教職校友会の定める「個人情報保護に関して」(平成17年制定)及び一般社団法人東京電機大学校友会の定める「個人情報保護規則」(平成30年制定)により対応します。
- *会員への当会からの連絡はご自宅住所宛を原則とします。住所変更、勤務先変更等がありましたら「一般社団法人東京電機大学校友会」にご連絡ください。

会報第44号に寄せて

東京電機大学教職校友会員の皆様には、日頃から本会の活動にご理解とご協力を賜り、深く感謝申し上げます。

あれほど猛威を振るった新型コロナウイルス感染症に関する話題が、人々中で交わされることが少なくなり、様々な活動がコロナ前とほぼ同等に回復してきました。本会の総会も昨年から、対面形式をメインにして当日に千住キャンパスにお越しいただけない会員の皆様にオンライン配信を行いました。

今後は、この形式がスタンダードとして定着していくと思います。また、今年は大学内での飲食が可能となり、大規模な懇親会とはいきませんが、交流会として復活しました。総会後に会員相互の親睦を深めることが更に可能となり、会長として嬉しく思います。

さて、皆様もご存じのように、教職校友会は、東京電機大学校友会の公認団体として位置づけられており、本会の活動は東京電機大学校友会からいただいている支援に寄って、支えられることを改めて皆様にお知らせをいたします。

その東京電機大学校友会から、この度「校友会の理念」について時間をかけて検討を行い決定に至ったと報告がありました。その中で、我々会員には「行動指針」が次のように示されました。

＜校友会活動でのあるべき姿＞

- ・自己研鑽に努めよう
- ・利他的心構えを忘れないようにしよう
- ・人格を尊重し合い多様性を重んじ、協同して行動しよう
- ・礼節を重んじ礼儀正しく行動しよう

今回示された「行動指針」は教職にある我々には、腑に落ちることばかりかと思えます。しかし、現在、教育界では、様々な課題が山積しており、その解決が日本社会全体で求められています。

教壇に立つ現職の先生方と教職OBの皆様が、その課題解決の先頭に立ち、「未来を担う人を育てる教職の魅力」を発信していくことが今後更に重要と考えています。この歴史ある教職校友会の活発な活動が、日本の工業教育を始め理数教育の発展に寄与するものであると確信しております。どうぞ引き続き、会員の皆様方のお力をいただけますようよろしくお願いいたします。

また、本会の目的は、創立当時と変わらず、大学と校友会とが緊密に連携し、相互の発展に協力し、会員の資質向上と親睦を図ることにあります。

毎年大学から示される「教職校友会枠指定校推薦制度」等に基づき、本会から将来有望な資質ある志願者を大学に推薦を行うなど、大学の募集・広報活動に協力して、今後も本会は大学、教職校友会相互の発展のために尽くしてまいります。

最後になりましたが、本会の運営に当たり、多大なご尽力を賜っております、校友会をはじめ幹事の皆様に、改めてお礼を申し上げます。

今年度もどうぞよろしくお願いいたします。

令和6年7月吉日

東京電機大学教職校友会
会長 杉浦文俊

特集 学校紹介

会誌 44 号の特集には、全国の 4 校からそれぞれの学校における特色ある教育の報告が寄せられました。

香川県

香川県立高松工芸高等学校電気科の取り組み

香川県立高松工芸高等学校 教諭

石丸 達也

■ 概要

近年の情報化社会のなかで、産業教育に関する方針や在り方が変わりつつある。2 年前からカリキュラムの改訂などもあり、観点別評価の見直しや、ICT 機器の積極的な導入などに取り組んでいる。そこで、近年の電気科での授業内容の取り組みや現状等について紹介していきたい。

■ はじめに

本校は、明治 31 年（1898 年）に創設され、今年で 126 周年を迎える。全日制に工芸科（金属工芸コース・漆芸コース・インテリアコース）・デザイン科・機械科・工業化学科・建築科・電気科・美術科、定時制にインテリア科・機械科・建築科を設ける県内最大のものづくり高校である。それぞれの学科が特色を活かしながら、日々作品制作や物作りに取り組んでいる。

■ 教育課程等について

・電気科の教育目標

電気・電子・情報技術などの幅広い分野を、基本的な内容を大切にしながら学習し、社会が求める人間性豊かなエンジニアを養成する。

・専門科目（座学）

工業情報数理、製図、電気回路、電気機器、電力技術、電子技術

・実習

1 年次（電子機器組立・機械工作・エクセル、c 言語、論理回路、ブリッジ回路、電圧降下法等）

2 年次（電気工事、トランジスタ特性、ダイオード特性、直流機、変圧器、单相電力等）

3 年次（シーケンス制御、オペアンプ、誘導機、同期機、高電圧、継電器、JW-CAD 等）

・課題研究のテーマ

発明工夫、資格取得、ものづくり、コンピュータ等例年本校の文化祭である工芸展に向けて様々な作

品を制作している。子供向けに UFO キャッチャー、ドローン、イライラ棒、テトリスなどのゲームを制作し喜ばれている。また発明工夫班では、毎年香川の発明くふう展に出展している。2 年連続で県知事賞を受賞して、「全日本学生児童発明くふう展」で入選した。



■ 主な資格・検定について

第3種電気主任技術者、第1種電気工事士、第2種電気工事士、2級電気工事施工管理技術検定、危険物取扱者各種、計算技術検定3級、情報技術検定3級、パソコン利用技術検定3級等第2種電気工事士は1年次の下期で全員受験している。電験3種、第1種電気工事、施工管理は希望者のみ。電験3種は昨年1名、2年前は2名合格した。



全国工業高等学校長協会主催のジュニアマイスター顕彰では、3年生35名のうち、特別表彰2名、ゴールド10名、シルバー7名が受賞した。先生方の努力により課外等で熱心に指導していただき、年々資格取得に生徒も意欲的になってきている。

■ ICT を用いた授業展開

昨年度より、全クラス生徒向けタブレット端末の貸し出しを行い、授業で活用している。教室、実習室にも無線LANが整備され、生徒自身で考え、調べ、改善させる能力を養うことができる。TEAMSを活用した授業なども展開しており、電気工事士の過去問を入力・集計、感想の共有や準備物、連絡事項に活用している。

また、全教室に電子黒板が導入された。専門教科の授業では、複雑な図などを板書する時間が省略でき、書き込むこともできるのでスムーズな授業が展開できている。香川県では県内の公立高校の黒板を3年以内に撤去する予定である。これからは教員のICTに対する対応力が問われる。

■ 進路状況について

	県内就職	県外就職	四年制大学	専門学校等	合計
R3	19	10	6	1	36
R4	17	9	11	0	37
R5	20	6	7	1	34

*就職のうち公務員を含む

コロナ禍で求人数は減少すると思われたが、予想に反してむしろ年々増加している。本校電気科の就職の割合は7～8割である（就職率は100パーセント）。進学する生徒のうち数名が国公立大学に進学している。

■ 地元企業や地域との連携

昨年は、四国電力坂出發電所を見学し、火力発電のしくみを勉強できた。また、香川県電気工事業協会の協力により、新香川県立体育館の電気設備工事だけで約20億円の壮大な工事現場を見学して、実践的な技能と仕事に取り組む姿勢を学んだ。

その他、日本電気協会や四国電力(株)から講師を招いて出前講座を実施した。仕事内容、社会人としての心構え、チームとしての仕事など学校では勉強できない事を多く学び自身の進路に向けて参考になった。



■ おわりに

ここ数年県内の入試において工業系の学科の定員割れが数校ある。本校だけは定員割れがないが、中学生の数が減少し、工業離れが起きているように思われる。今後、各学校で入学生をどう確保していくのか試行錯誤している状況である。本校でも中学生に対して学科説明会や工芸展を実施することで、進路先や授業内容を説明してアピールしている。これからは、さらに学校のPRの方法や地域、小・中学校など今まで以上に幅広く工業高校の魅力を発信していかなければならないと考えている。

大分県

大分県立情報科学高等学校 ～未来へ Jyoka～

大分県立情報科学高等学校 非常勤講師

佐藤 茂

ある授業での光景・・

リーダーをしたい人は・・「はい!」、今日の授業では課題の設定をしていきましょう・・「課題の深掘りをしなくては」「ペルソナを設定しています」などと多くの生徒から日常会話のように言葉が出てきます。

■ はじめに

大分県立情報科学高等学校は、大分市中心部から東へ、レゾナックドームで有名な大分スポーツ公園近くに位置し、昭和63年に工業科と商業科を併設する専門高校として開校しました。令和6年度から募集定員が1学級増え、1学年5学級となりました。入試においては、毎年県下トップクラスの競争倍率

を誇っています。

令和5年度より、AIテクノロジー科（工業科）・ビジネスソリューション科（商業科）・デジタル創造科（情報科）の3つの学科に改編され、それぞれの学科が垣根を越えて融合しあい、新しい時代に向けた未来の学校創りを進めています。従来の工業科や商業科という枠を超えて、ICTやAIを活用し、次代を担う情報・ICT人材を育成することを学校の使命としています。

■ 特徴ある新学科

学科改編前は、工業系の情報電子科、商業系の情報管理科・情報経営科の専門高校でした。改編によって、工業・商業・情報と3つの学科からなる情報系の高校となりました。

3つの新学科の特徴は

〈AIテクノロジー科（工業科）〉

AIやドローンの活用など先端技術やものづくりの技術を身につけます。工業科目だけではなく、情報科目や課題研究でもものづくりの知識・技術を活かす学びも展開します。

〈ビジネスソリューション科（商業科）〉

Webをはじめとするコンテンツマーケティングやエンドユーザとしてのアプリケーションスキルを学びます。情報科目や企業などと協働しながら課題を解決する力を身につけていきます。

〈デジタル創造科（情報科）〉

情報に関する基礎を習得し、情報技術・情報セキュリティを身につけます。情報科目だけではなく、工業・商業科目も学び、課題探究学習を通してコミュニケーションや情報発信に関する知識・技術を習得します。

■ 情報科学高校だけの自慢

〈コミュラボ〉

3Dプリンタやレーザーカッターなどの最新の工作機械が設置され、生徒のアイデアからさまざまなものを作り出しています。デジタルによるものづくりを広める外部講師を招いて、これらの機械の活用術を学び、創造性を豊かにした取り組みをしています。

〈ドローンサッカーコート〉

工業棟と商業棟の間にある多目的広場（屋内施設）には、人工芝を敷いた高校では全国初のドローンサッカーコートがあります。授業でのドローンプログラミングや放課後、ドローンサッカー部が公式大会に向けた練習を行っています。



■ Jyoka Style（ジョーカ スタイル）

情報科学高校ならではの「学びのスタイル」

課題解決型学習を通じて主体的に取り組む授業・複数の学科の融合・企業や団体との連携など様々な学びを通じた、独自の学習スタイルに取り組んでいます。

■ Jyoka Pride（ジョーカ プライド）

社会が大きく変化しているなかで、学校においても柔軟な発想による変革が必要で、その根幹をなすのが意識改革です。「Jyoka Pride」という、生徒も教員も一体となって同じ目標に向かっていく取り組みを橋本校長が提案し、いろいろな場面で成果を上げています。



■ 大分県から全国へ

〈課題解決型学習〉

生徒自ら考え、アイデアを生み出し、創造する力を育成する取り組み、アイデアを課題解決型学習で具体的にし、成果物を生み出す取り組みを実践。1年次は課題解決に向けた探究、2年次から課題研究として生徒が主体的に課題を見つけ、解決策を具体化、3年次に3年間の成果として、解決のためのアイデア出し・実行・検証することを目標にしています。

〈学科を超えバーチャルカンパニー設立〉

昨年度は「未来博覧会」を生徒が主体となって企業や専門学校の協賛、会場設営依頼、近隣の小中学校への告知を行い、開催。多くの小中学生が、企業や専門学校、生徒による未来技術の取り組みを体験しました。大阪万博の関係者も視察に訪れました。

〈生徒が先生〉

生徒が主体となった小学校や支援学校でのドローンプログラミング講座の開催や体験入学での体験授業の準備から実施。

令和2年度大分県教育委員会の「未来を拓く学校事業」に指定。全国で初めて企業が学校に常駐、デザインシンキングなどを取り入れた新たな授業手法と一緒に実践しています。令和5・6年度生成 AI パイロット校（リーディング DX スクール事業）、令和6年度リーディング DX スクール事業の指定校、令和6年度高等学校 DX 加速化推進事業（文部科学省）に採択されました。

デザインシンキングを取り入れた学び、生成 AI を教育活動や校務に活用、外部企業と連携した先端技

術の学びなど、情報科学高校でしか学べない取り組みを実践しています。

橋本校長や先生方の先進的な取り組みが評価され、令和5年度には、文部科学大臣優秀教職員表彰を受けることができました。さらに取り組みが全国的に注目され、多くの学校・地域関係者が視察に見えています。

■ 未来へ

生徒が主役のどこにもない学びを深化させ、常に一歩先を行く学校を情報科学高校は目指しています。



マスコットキャラクター「ジョー」 情報科学高校 URL

※ 学校の取組は、[進路 GUIDE BOOK2023]、[未来へ（情報科学高校3年間の挑戦の軌跡）]、[令和6年度学校要覧]などから抜粋

東京支部

「Next Kogyo START Project」

令和7年度「ものづくりを学ぶ新学科」の設置に向けた準備状況について ～工科高校改革の最前線より～

東京都立六郷工科高等学校システム工学科科長

河野 恒義

■ 本校の特色と令和7年度改革

平成16年度開校の六郷工科高校は単位制高校であり、東京都・工科高校改革 (Next Kogyo START Project) における最後の1校です。全日制課程は、プロダクト（機械）、オートモビル（自動車）、システム（電気・情報）、デザインの各工学科に加えて、日本初のデュアルシステム科の5学科で構成されています。令和7年度からは学科枠を取り払い、単位制の特色を活かし2年次より多彩な自由選択科目が履修でき分野横断的な学びを生徒が主体的に取り組める新しいタイプの学校へと進化・変貌を遂げる予定です。

筆者は、前任校の6年間の荒川工業高校勤務を経て昨年度から六郷工科高校へ異動になりました。前

任校では情報技術科に所属し、東京 P-TECH¹ と称する改革に取り組んでいました。その経験を活かしつつ、本校の工業改革プロジェクト（未来構想 PJ）をリードすることになりました。本稿は過去1年間の具体的な取り組みと今後の六郷工科高校改革の方向性の概要を取りまとめたものです。

■ 未来構想委員会での検討事項

未来構想委員会が令和5年5月31日（水）に発足し、1年間をかけて2年後に迫った学科改変の基本事項を確認・決定していきました（図1）。まず、骨太方針として「先端技術を学べる学科」からスタート。

¹P-TECH: Pathways in Technology Early College High School の略。高校段階から IT 業界や IT 関連職への就労と活躍の道筋を作る取り組み

新学科の方向性を「STEAM ×DX×AI」²とし、生徒が先端技術に触れ、自己調整能力を身に付け、分野横断的に学べる学校としました。単位制の特色を最大限に活かしつつ、キャッチフレーズを「“好き”を究める授業が選べる」と定め、多様なモデルコースを提案することで「就職も進学も目指せる学校」をPR。1年生から「キャリアデザイン」、2年生から「探究」を開始し、3年生では「分野横断的なPBL³型課題研究」を目指すことに決定しました。



図1. 学科改編概要

■ 基礎科目の取り組み

＜工業情報数理＞

現行の工業情報数理には2つの問題点が指摘されています。1つ目は、「情報I」の代替科目としての説明責任が果たせていない。2つ目は、「情報デザイン」分野の単元が極めて少ないという点です。そこで、新カリキュラムでは、情報Iの各単元を基準として次のように実践していきます。

- [1学期] 1章「情報社会と私たち」、4章「ネットワークセキュリティ」
 - 情報セキュリティ、情報モラルを中心に学習。
- [2学期] 3章「システムとデジタル化」、6章「アルゴリズムとプログラミング」
 - 情報技術検定の基礎知識を理解。
- [3学期] 2章「メディアと情報デザイン」、5章「問題解決とその応用」
 - 情報デザイン分野の充実。特に「問題解決とその応用」では、電大の三谷政昭名誉教授とそのOBによる「デジらくだ」⁴に協力

²STEAM × DX × AI : STEAM 教育と先端技術である AI を授業に取り入れ DX 人材育成を目指す取組

³PBL : Project Based Learning (課題解決型学習)

⁴デジらくだ:2017年9月より、東京電機大学・三谷研究室所属の卒業生を主要メンバーとして立ち上げられた「信号処理教育支援のためのボランティアサイト」(URL:https://digirakuda.org/)

を仰いで、先端技術を取り入れた課題解決型教材の開発を進めています。一つの取り組みとして生徒にとって身近な Youtuber の推薦システムを Python プログラミングで記述し開発を行っています(図2)。このほか、さまざまなテーマの発案・試行錯誤を繰り返し、令和7年度以降の授業スタイルを確立して行く予定です。

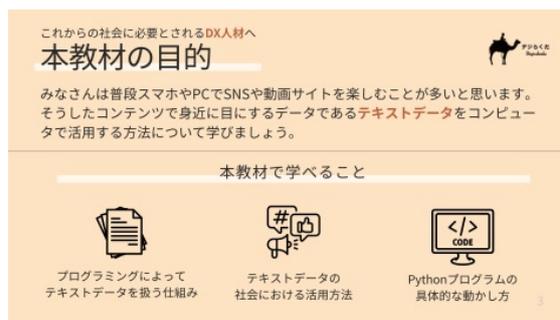


図2. 教材スライド抜粋

＜工業技術基礎＞

令和7年度からは、各工業科4科(プロダクト、オートモビル、システム、デザイン)の特色を出し合い、すべての生徒に対し、分野横断的な実習を体験させる取り組みを行い、各専門分野の知識を課題解決に活かす人材を育成します。

本校では、令和7年度からの工業技術基礎の授業形態を仮称「ぐるぐるまわし」と呼び、1年間を前半と後半に分けて、前半7テーマ×2回、後半6テーマ×2回の実習を計画しています。前半のローテーションでは、各分野3~4回の実習を通して、2年生以降の進むべき道を選択できるようアシストします。後半は、自動車整備士と電気主任技術者に関わる資格取得コースおよび美術系大学進学コースを始め、前半より専門性の高い「ぐるぐるまわし」を体験して2年生以降の高度技術の習得理解と分野横断的な学びに誘います。

■ 分野横断的なPBL型課題研究

1年生「人間と社会」(東京都独自教科)では、マナー講演会、企業訪問、インターンシップ、演劇的WSなどの様々な取り組みを通して、生徒一人ひとりのコミュニケーション能力向上とキャリアデザインを支援します。2年生「探究」では、さまざまな思考ツールを学習し、SDGsなどのテーマに対してグループで課題解決型学習に取り組みます。3年生では、従来の課題与え型実習を払拭し、社会課題を発

掘し分野横断的なPBL型課題研究に取り組みます。グループのアイデアを集結し、AIなどの先端技術に関しては、外部人材の力を借りながら、これまでにない発想で課題解決に取り組んでもらいたいと考えています。

PBLに対しては、専門知識を教えるハードルの高さを心配する声も上がりますが、その懸念を払拭するための一案として、外部組織など社会のリソースを積極活用することにより、最先端技術の学習環境を構築するアプローチが挙げられます。そのためには、生徒と外部人材の間をスムーズにつなぐ人材養成と共に、生徒と先生が協力して学習を進める協働的学習を実現しつつ、生徒の主体的で深い学びができる環境づくりをするファシリテーション能力が必要になります。

■ 令和7年度のスタートに向けて

令和6年度入試では、多くの工科高校が生徒募集に苦戦する中、本校では、推薦入試倍率1.18倍、一般入試ではシステム工学科の倍率が1.55倍となり、

明るい未来を実感しています。普通科や総合学科に比べ、工科高校には卒業後の就職先が充実し、生徒の多様な進路選択できる環境も整いつつあります。しかしながら、1年次の段階では、自分の進むべき方向性を決めかねているケースも多いようです。多種多様なモデルコースを提示して卒業後の進路を”見える化“することが、生徒・保護者にとっての魅力につながるのではないのでしょうか。その上で、地域や企業から支持される存在にならなくてはなりません。東京都のNext Kogyo START Projectは、在校生・卒業生にとっての母校を未来に残す仕事です。プロジェクトに関わる一人の教員として、令和7年度改革が最良の形で実現できるよう、学校内外の多くの協力者を巻き込んで努力してきたいと思います。是非、先生方の忌憚の無いご意見をお聞かせください。皆さんのお知恵を拝借し、より良い工業教育の発展に取り組んで参りたいと思います。本稿を読まれて興味を持たれた方は、メール(Hisayoshi.1.Kouno@education.metro.tokyo.jp)にてご連絡ください。

東京支部

北豊島中学校高等学校の紹介と情報科の授業

北豊島中学校・高等学校 教諭

井坂 晃宏

■ はじめに

本校は、創立1926(大正15)年の、もうすぐ100周年を迎える中高一貫の小規模な女子校で、創立者である秋上ハル先生により、「社会に出て自立できる、活躍できる女性の育成」を掲げて始まりました。



登校風景

「良妻賢母の育成」が当然であると考えられていた当時においては、とても先進的な学校であると思われる。そんな本校は、東京メトロ千代田線・京成本線

の町屋駅から歩いて15分ほど、都電荒川線沿線の下町風情が残る居心地のよい街に位置しています。道を挟んだ向かいには、都立大学荒川キャンパスもあり、落ち着いた長閑な雰囲気のある街の中にあるためか、本校の生徒も実に穏やかで真面目な生徒が多い印象です。そして、この100周年を迎えるにあたり、まさに教育環境を改革する取り組みが行われている最中でもあります。

特に大きな変化は、今までの普通科に設置していた3つのコース(特進、総合、国際英語)を、それぞれプログラム制(Inspiring Program、Valuable Program、Global Program)として改称・改編し、学年単位ではなく各プログラム単位の3年間という時間軸で生徒をサポートする体制となりました。英語教育の充実やリベラルアーツ教育の推進、高大教育連携などによる生徒の学習意欲の向上を共通としながら、プログラムごとに多様な企画を織り交ぜ、特色のある教育を行っています。

まず英語教育については、専任のネイティブの教員が6名おり、日常的に英語に触れることができる環境を整えています。授業だけではなく、放課後にも英語でコミュニケーションを取る時間を設け、フリートークや英検対策など生徒の希望に沿った取り組みもしており、役立つ英語を身に着けることができるようになってきました。また、海外協定大学推薦制度もあります。これは、イギリスやアメリカ、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、アイルランドの42大学と協定を結び、海外大学の受験を希望する生徒に向けての情報提供や進路サポートを行っています。ここ数年は、Global Program（旧国際英語コース）を中心として何人も生徒が海外の大学に合格し、進学をしています。

また、リベラルアーツ教育を推進していることも本校の特徴であるかと思われます。これは、文系理系という概念にはあまり囚われず、幅広い知識を身に着け、多角的な視点で考える力を育成することを目指しているものです。その中で、例えばやってみようという授業のアイデアがあると、異なる教科の教員とでもコラボレーションできる柔軟かつフットワークの軽さは、小規模校ならではの感覚を感じています。

■ 情報教育環境

一人一台の端末を所有すること等を目指した文部科学省によるGIGAスクール構想が2019年ごろから謳われ始めましたが、本校では2020年度の中高の新1年生から学年進行でタブレット端末の導入が始まりました。当初はiPadを採用し、キーボード入力に慣れるためのキーボードカバーもつけました。その後3年間はiPadを導入していましたが、後述するプログラミング環境等を考慮し、現在はタブレット型PCであるSurface Go 3とキーボードカバーの組み合わせとなりました。



タブレット端末の利用

また、学校全体ではMicrosoft 365の包括契約により、教職員と全生徒にMicrosoft 365のアカウントを付与し、これをもとにMicrosoft TeamsやOneNoteを活用した授業を行っています。教材の配布、課題の提出などでよく利用され、だいぶ活用の幅が広がってきました。これに加え、英語の学習に特化したeラーニングシステムや、フルクラウド型の教務システムを導入するなど、ここ数年で校内のICT化が急速に進んできました。なお、こういった環境の管理を担う情報システム部門は、情報科を担当している私が行っています。

■ 情報Ⅰの授業について

情報Ⅰの前身の授業は「社会と情報」でした。前述の通り、はじめの3年間はiPadを使用していましたが、この途中で新課程の情報Ⅰになり、プログラミングを本格的に取り扱う必要性が出てきました。プログラミング言語はPythonを採用し、はじめはブラウザベースによるテキストプログラミングができる有料サービスを使用していました。このようなサービスは生徒の学習の進捗状況が把握できるなどの機能があり便利ではあるものの、少し自由度が低いことや、生徒の端末に低コストのPythonによる自由なプログラミング環境を構築して利用してもらいたいとの思いから、昨年度からはSurface Go 3を導入することにしました。Pythonの実行環境や、テキストエディタとしてVisual Studio Codeをインストールすることにより、本格的なプログラミング環境を構築することができました。なお、Visual Studio Codeはプログラミングだけではなく、HTML+CSSによるWebページの制作にも使用できるので、活用の場面が広がります。

プログラミングは、プログラムファイルを作成し、コマンドラインで実行するというスタイルを取っています。スマートフォンやパソコンを指やマウスで操作することしか経験ない生徒が殆どなので、はじめは非常に取っ付きにくく、なれるまで時間がかかります。しかし、慣れてくると比較的スムーズに操作できるようになります。さらに、感の良い生徒は飲み込みが早いので、自らプログラムを修正して実行し、理解を深めている様子も見られます。

情報Ⅰの学習ではプログラミング以外にも統計（データの分析）を扱っていますが、こちらはExcelを利用しています。できればPythonを使うかRのようなツールも利用したいと考えていますが、授業時数を考慮すると少々消化不良に終わりそうなの

で、こちらは今後の課題としています。

この情報Ⅰは1年次のみでの授業なので、共通テストで情報Ⅰを必要とする生徒には、2年次以降に夏休みなどを利用して講習を実施し、演習を中心に学習を行っています。生徒にとって難しいのは、やはり「コンピュータとプログラム」の領域です。実際にプログラムを実行せず、紙上で実行をイメージする必要があるため、プログラミング経験がある程度ないと、難しいのは確かです。設問のプログラムをPythonに書き直し、実行して確認するということを生徒自身が経験する必要があることを感じています。

■ 情報科の今後について

情報科のカリキュラムは、必修の情報Ⅰを1年次で、選択科目として情報Ⅱを3年次で学びます。今年度から始まった情報Ⅱの授業については、かなり専門的な内容ではあるものの、それでも今年度は4人が選択してくれました。はじめのうちは座学を中心にいき、少しずつ実習を取り入れるなどしています

が、教材準備と同時進行で試行錯誤しながら行っているのが現状です。このような状況の中、先日、文部科学省の高等学校DX加速化推進事業（DXハイスクール）に採択されました。これにより、例えば高速な演算を行えるコンピュータを導入し、ニューラルネットワークの学習プログラムを作成するなど、より進んだ内容に挑戦したく思っています。また、併せてモノ作り環境を整備し、数学科、理科、情報科の連携を中心とした授業を計画しています。今後は理系分野の興味関心を持ってもらい、さらには理系学部に進学する生徒が増えることを願っています。

■ 終わりに

本校は、中高合わせても230人ほどの小ぢんまりとした学校ですが、それ故に生徒も教員に対して気軽に話しかけてくれます。素直な性格の多い生徒にとっては、街だけではなく学校内の居心地の良さや相まって、伸び伸びとした学校生活を送れる場所なのではないかと思っています。

令和6年7月

会員各位

東京電機大学教職校友会

会費納入のお願い

会員の皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。皆様には日頃より東京電機大学教職校友会の活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。

さて、本会は、教職に携わっていらっしゃる卒業生のなかで事務局が把握できた方々を会員とさせていただいている組織です。したがって、必ずしも皆様の入会意思を確認させていただいたり、申込み手続きによる処理などをとることはいたしておりません。しかし、全国各地の教壇で活躍される卒業生は、母校にとって大切なネットワークであることから、学校法人東京電機大学および一般社団法人東京電機大学校友会は、本会の活動に対して大きな期待を寄せております。教職校友会の活動は、微力ながらも母校東京電機大学および東京電機大学校友会と一体となり、学園発展への一助をなすものと確信しております。

本会の活動に当たっては、学校法人東京電機大学および一般社団法人東京電機大学校友会より多大の援助をいただいておりますが、この度は年会費の振込用紙を同封させていただきました。会費の納入は会員の皆様にご無理をお願いするものではございませんが、教職校友会の趣旨をご理解いただきまして、多くの皆様にご協力を賜りたくお願い申し上げます。年会費は1000円となっております。

なお、自動引落としで年会費を納入していただいている皆様にも、発送手続きの処理上、振込用紙を同封いたしました。失礼の段お詫び申し上げます。

末筆でございますが、会員の皆様のますますのご活躍をご祈念申し上げます。

令和5年度・6年度の活動について

令和5年度

■ 令和5年度事業報告

- ・4月12日 事務局打合せ
役員会に、総会の会場開催とオンライン配信、講演会講師、会報発行、教職校友会枠推薦調整会議日程などを提案することを確認した。
- ・5月8日 役員会
総会および講演会の会場開催、会報43号の発行、教職校友会枠推薦の実施、名簿整理の実施などを決定した。
- ・6月24日 令和5年度総会および講演会
総会を会場開催し、東京電機大学国際センター長宍戸真教授による講演会「英語教育とAI」を開催した。
- ・7月7日 会報43号の発行
「教育改革への取り組み」を特集した会報43号を発行した。

教職校友会枠推薦入試制度への協力

- ・9月8日 教職校友会枠推薦調整会議
全国20校から応募があり、43名の推薦を承認した。入試センターを通じて各学部でも承認され、43名全員が出願し合格した。

■ 令和5年度会計報告ならびに会計監査報告

令和6年6月22日

令和5年度 東京電機大学教職校友会 決算報告

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
前年度繰越金	605,101	会議費	31,100
会員会費	74,690	事務経費	113,945
雑収入	20,000	予備費	0
		次期繰越金	554,746
合計	699,791	合計	699,791

一般社団法人東京電機大学校友会から会報発行費、通信費の援助をいただいています。

会計幹事 森田 訓敏
高橋 勉

厳正に監査し、相違ないことを認めます。
令和6年4月1日

会計監査 荒 繁 勝
大田 智 輝

令和6年度

■ 令和6年度事業計画

- ・総会および講演会開催
総会および講演会の開催を計画する。
総会・講演会は会場参加が叶わない会員のためオンライン配信を計画する。
- ・交流会の再開
総会開催に合わせ、コロナ禍で中断していた交流会（懇親会）を開催する。
- ・令和6年度会報（第44号）の発行
各支部等に協力を要請して読み物としての充実を図る。
特集記事のテーマは「学校紹介」（2025年度入試から共通テスト出題となる情報IIの紹介など）とする。
- ・会員情報調査・メールアドレスの収集
随時情報収集に務める。
- ・支部活動への協力
各支部の総会開催などに協力する。
- ・教職校友会枠推薦入試制度への協力
例年通り実施する。
- ・役員会・事務局打合せの開催
事業の計画・実行のための会議・打合せを随時開催する。

■ 令和6年度予算（案）

令和6年度 東京電機大学教職校友会 予算(案)

(令和6年4月1日より令和7年3月31日まで)

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
前年度繰越金	554,746	会議費	40,000
会員会費	70,000	事務経費	150,000
雑収入	0	予備費	434,746
合計	624,746	合計	624,746

このほか、東京電機大学校友会、東京電機大学からの援助が予定されています。

令和6年度 顧問・役員・幹事一覧

* 随時確認しておりますが、情報不足のための誤りを危惧しています。情報をお寄せください。(編集担当)

顧問	学校法人東京電機大学理事長 東京電機大学学長 一般社団法人東京電機大学校友会理事長 (元)群馬県立伊勢崎工業高等学校長 (元)群馬県立藤岡工業高等学校長 (元)山形県立長井工業高等学校長 (元)東京都立港工業高等学校長 (元)神奈川県立神奈川工業高等学校長 (元)埼玉県立春日部工業高等学校長 (元)福島県立小高工業高等学校長 (元)東京都立練馬工業高等学校長 (元)東京電機大学高等学校教頭 (元)東京都立府中工業高等学校長 (元)国立東京工大付属工業高等学校副校長 (元)東京都立武蔵野北高等学校長 (元)群馬県立高崎工業高等学校長 (元)東京電機大学中学校・高等学校長 (元)関東第一高等学校長 (元)神奈川県立神奈川工業高等学校長 (元)東京都立多摩工業高等学校長 (元)福島県立小名浜高等学校長 (元)福島県立湯本高等学校長 (元)静岡県立静岡工業高等学校長 (元)関東第一高等学校長 (元)東京電機大学高等学校教頭 (元)埼玉県立久喜工業高等学校長 (元)静岡県立藤枝北高等学校長 (元)埼玉県立騎西高等学校長 (元)茨城県立日立工業高等学校長 (元)神奈川県立神奈川総合産業高等学校副校長 (元)山梨県立谷村工業高等学校長 (元)東京都立蔵前工業高等学校長 (元)東京電機大学高等学校教頭 (元)尚志高等学校副校長 (元)群馬県立桐生工業高等学校校長 (元)東京都調布市立第四中学校長 (元)東京電機大学中学校・高等学校長 (元)埼玉県入間市立藤沢中学校長 (元)神奈川県立商工高等学校副校長 (元)東京都立足立工業高等学校副校長 (元)東京都立蔵前工業高等学校長 (元)山梨県立甲府工業高等学校校長 (元)埼玉県立大宮工業高等学校長 一般社団法人東京電機大学校友会事務局長	石塚 昌昭 射場本 忠彦 森戸 義美 町田 峯勝 中曾根 喬 山口 康夫 村上 尚 久保倉 清 星野 時二 井上 精三 小池 敏男 中村 隆一 平林 洋志 青木 輝寿 小原 政敏 加藤 通頭 高久 廣毅 吉村 正昭 梅田 政勝 橋本 三男 田仲 敏晃 辺見 広一 佐藤 義雄 池田 二郎 見崎 正行 新井 誠 山口 房夫 廣瀬 成一 高畑 啓治 平野 隆士 教野 均 豊田 善敬 津村 栄一 網田 雄治 樋口 高則 藤倉 正道 向芝 京太 佐藤 文憲 櫻場 博 瀧澤 龍司 三神 幸男 手塚 幸樹 清水 雅己 友常 岳浩	会長 東京都立工芸高等学校長 副会長 栃木県立那須清峰高等学校 茨城県立勝田工業高等学校 東京都立足立西高等学校長 埼玉県立川口工業高等学校副校長 (元)東京都立工業高等専門学校教授 神奈川県立向の岡工業高等学校教頭 山梨県立都留興譲館高校 (元)静岡県立科学技術高等学校校長 千葉県立京葉工業高等学校 幹事 神奈川県立磯子工業高等学校 東京電機大学中学・高等学校 東京電機大学中学・高等学校 東京電機大学中学・高等学校 庶務幹事 東京都立蔵前工業高等学校 埼玉県立狭山工業高等学校教頭 千葉県立千葉工業高等学校 会計幹事 東京都立墨田工業高等学校主任教諭 東京都立六郷工科高等学校 会計監査 東京都立北豊島工科高等学校長 東京都立足立工業高等学校主幹教諭 特別会員 (元)千葉県立清水高等学校 (元)静岡県立清水工業高等学校教頭 (元)神奈川県立向の岡工業高等学校教頭 (元)東京電機大学高等学校 (元)羽黒高等学校教頭 (元)静岡県立浜松工業高等学校教頭 (元)千葉県立京葉工業高等学校 (元)栃木県立真岡工業高等学校 (元)山梨県総合教育センター副所長 (元)読売東京理工専門学校 (元)大森学園高等学校 事務局 東京都立蔵前工業高等学校 埼玉県立狭山工業高等学校教頭 千葉県立千葉工業高等学校 (元)東京電機大学中学校・高等学校長	杉浦 文俊 高松 秀和 藻垣 祐郎 丸茂 聡 田中 克典 前田 治 嶋村 圭一 田中 祐司 松村 照司 中村 啓介 小室 卓也 古城 仁 河野 吉伸 米山 裕 渡邊 博之 高橋 勉 清崎 起代則 森田 訓敏 後藤 真理子 荒 繁勝 大田 智雄 石渡 祥照 大越 和夫 河本 一利 前嶋 万人 松田 弘義 松本 恒彦 山本 義彦 小堀 英雄 有泉 淳 松下 祐輔 加藤 三郎 渡邊 博之 高橋 勉 清崎 起代則 向芝 京太
----	---	---	--	---

令和6年度 教職校友会会員数 都道府県住所別 学校種別分類

	OB	高校	養護	中学	小学	高専	専門学校	その他	大学	短大	非常勤	計
北海道	3	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	7
青森県	3	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	8
岩手県	3	2	0	1	0	0	0	0	0	0	1	7
宮城県	4	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	5
秋田県	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	4
山形県	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
福島県	8	17	0	6	0	0	0	0	0	0	0	31
茨城県	15	23	2	6	1	2	0	1	1	0	0	51
栃木県	7	15	0	6	0	0	0	1	0	0	0	29
群馬県	14	20	0	9	0	0	0	0	0	0	1	44
埼玉県	76	116	6	51	5	0	7	4	1	0	11	277
千葉県	74	47	1	25	0	0	0	5	0	0	1	153
東京都	87	123	5	21	1	0	5	3	1	0	3	249
神奈川県	55	41	0	19	1	0	0	2	0	0	2	120
新潟県	4	6	1	5	0	0	0	0	0	0	0	16
富山県	6	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	7
石川県	1	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	4
福井県	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
山梨県	6	12	0	2	0	0	0	1	0	0	0	21
長野県	4	6	1	7	0	0	0	0	0	0	0	18
岐阜県	1	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	5
静岡県	22	16	0	10	0	0	1	1	0	0	2	52
愛知県	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	4
三重県	2	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	6
滋賀県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
京都府	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
大阪府	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3
兵庫県	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	3
奈良県	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
和歌山県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鳥取県	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
島根県	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
岡山県	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	3
広島県	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
山口県	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4
徳島県	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
香川県	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
愛媛県	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
高知県	4	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
福岡県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
佐賀県	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
長崎県	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
熊本県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大分県	5	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	8
宮崎県	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
鹿児島県	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
沖縄県	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4
その他	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
計	433	471	17	188	10	2	16	20	3	0	22	1182

65歳を超えた方はOBとして集計してあります。65歳以前に退職された方、65歳を超えて現職の方はご連絡ください。

東京電機大学教職校友会 会則

第1条 本会は、東京電機大学教職校友会と称し、昭和43年8月1日設立。事務局を東京都足立区千住旭町5番におく。

第2条 本会は、学校法人東京電機大学及び、一般社団法人東京電機大学校友会と緊密に連繋し、その発展に協力し、会員の資質の向上と親睦をはかることを目的とする。

第3条 本会は、次の会員をもって組織する。

- 一、正会員 東京電機大学の経営する各学校の卒業生で、現に小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、盲・ろう・養護学校、高等専門学校、専修学校、その他の教育機関に勤務する者。
- 二、特別会員 本会の趣旨目的に賛同する者で役員会の承認を得た者。

2. 本会に次の顧問をおく。

- 一、東京電機大学の経営する各学校の学長および校長。
- 二、本会に特に功労のあった者で、役員会が推薦する者。

第4条 本会に次の役員をおく。ただし任期は2年とし、再任を妨げない。

会 長	1名	副会長	若干名
幹 事	若干名	庶務幹事	2名
会計幹事	2名	会計監査	2名

2. 会長及び副会長は会員のうちから役員会が選出する。
3. 幹事は各支部ごとに支部長の推薦するものとする。

第5条 会長は、本会を代表し会務を総理する。

2. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある時は会長の職務を代行する。
3. 役員および幹事は、会長の命を受けて会務を処理し、会計監査は会計を監査する。

第6条 本会の会合は、次のとおりとする。

- 一、総会 毎年一回開き、会務報告その他必要事項を審議する。
- 二、役員会 必要に応じて会長が招集し、会

務を処理する。

- 三、その他の会合 会長が必要と認める場合は、前二号以外の会合を召集することができる。

第7条 本会の目的を達成するための経費は会費、補助金および寄付金による。

2. 会費は、正会員1名につき年額1000円とする。ただし、会長が特に必要があると認める時は役員会にはかり、臨時会費を徴収することができる。
3. 本会の会計年度は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第8条 第8条 この会則は、総会において出席会員の過半数の同意により変更する事ができる。

1. この会則は、昭和43年8月1日より施行する。
2. 本会の運営のために必要な細則は役員会にはかり、会長が別に定める。
3. 昭和47年2月20日 会則の一部を変更し、施行する。
4. 昭和48年6月11日 会則の一部を変更する。
5. 昭和50年3月31日 会則の一部を変更する。
6. 平成6年12月10日 会則の一部を変更する。
7. 平成8年6月22日 会則の一部を変更する。
8. 平成27年6月22日 会則の一部を変更する。

【申合せ事項】

1. 本会の目的を達成するため、都、道、府、県に都道府県支部会を設ける事ができる。各支部会の会則は、各支部において別に定める。
2. 各支部会は都道府県の支部長を長とし、必要に応じ支部会内に役員を設け、支部会の事業を行うものとする。支部長は本会の副会長とする。
3. 本会が全国組織の会であるため、総会に多数の出席が困難と予想されるときは、役員会の原案を書面連絡で審議して決定することができる。

令和6年度 会報 第44号

発行日 令和6年7月8日

東京電機大学教職校友会

事務局 一般社団法人東京電機大学校友会内

〒120-8551

東京都足立区千住旭町5番 東京電機大学 1号館2階

電話番号 03-5284-5140

FAX番号 03-5284-5187

eメール kouyukai@jim.dendai.ac.jp

郵便振替口座 00100-4-71400